

Title	日本語のゼロ名詞補部構造の認可要素としての「の」
Sub Title	"No" as the licenser of the null nominal complement constructions in Japanese
Author	星, 浩司(Hoshi, Koji)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.35 (2005.),p.19- 53
JaLC DOI	
Abstract	This paper investigates into the structure of noun phrases in Japanese, focusing on issues surrounding a subtype of the particle no in standard Japanese/Tokyo dialect and its equivalents in other dialects. Based on but extending Saito and Murasugi's (1990) insight, I will claim that there is a functional head D which functions as the "potential null nominal complement licenser" in Japanese, apart from a D as the locus of the genitive Case marker. In so doing, I will put forth a PF licensing condition on the structure of the DP and a PF economy condition on lexical realization, discussing some of the consequences of my proposal as well in connection with two types of the complementizer C and various constructions related to the particle no in Japanese.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20050002-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

詞律分析システムの構築に向けて

村越 貴代美

はじめに

詞は、本来が音楽に載せて歌われた歌詞であったために、その格律のパターンは、古近体詩と比べて格段に複雑である。本研究は、詞の格律（以下、詞律）を研究する方法の一つとして、作品を電子化して分析するシステムを構築しようというものである。

詞律の研究は清代に盛んになり、康熙二十六年（一六八七）に万樹が『詞律』二十巻を著し、康熙五十四年（一七一五）に『（欽定）詞譜』四十巻が編纂された。『詞律』は唐・宋・金・元の詞、六百六十調、千百八十余体を取め、『詞譜』ではさらに増えて、八百二十六調、二千三百六体を取める。さらに杜文瀾が『詞律』を補訂した『校刊詞律』が光緒二年（一八七六）に出て、拾遺補遺合わせて八百七十五調、千七百二十五体となり、よく利用されているが、この中には作品例の少ない僻調もかなりの数ある¹⁾。こうした詞譜は、詞がメロディを失っても韻文のスタイルとして残り、後人が既出の作品の格律を模して詞を作ろうとしたために、編纂されたものである。

詞が歌われていた当時は、メロディにそって歌詞を作り、その場の即興や歌手の技量で多少の字句の増減も自在にできたのであろう。詞牌で、「添字」「攤破」とあるものは、基本の形式に対して歌詞を引き伸ばしたものと見られる。また、「促拍」はテンポが速いの意だが、テンポが速くなると字数も多少増える。たとえば、「醜奴兒」四十四字に対して、「攤破醜奴兒」六十字、「促拍醜奴兒」六十二字がある。逆に、「減字」「偷声」とあるものは、基本の形式から一部歌詞を減らしたものと見られる。たとえば、「木蘭花」五十二字から五十六字に対して、「減字木蘭花」四十四字、「偷声木蘭花」五十字、がある。これら

1) 萩原正樹「『欽定詞譜』訂誤——僻調について」（『学林』十八、八十七～百二頁、一九九二年）、参照。

は同調異体と呼ばれ、増減の幅もさほど大きくはない。

ところが、北宋の中頃に曲調の大幅なアレンジが流行ると、同じ詞牌であっても字数はかなり異なる。唐五代に主流であった四十字からせいぜい六十字程度のものを小令といい、北宋中頃以降に主流となった百字前後、中には二百字を超えるものを慢詞あるいは長調という。たとえば、「浣溪沙」四十二字に対して「攤破浣溪沙」四十八字があるが、これが「浣溪沙慢」になると九十三字、ほぼ倍の長さになっている。「浣溪沙」と「浣溪沙慢」のように、小令の詞牌に「慢」をつけて違いを表すものが多いが、中には、「浪淘沙」二十八字に対して「浪淘沙令」五十二字、「浪淘沙慢」百三十三字、のように、詞の小令となる以前に近体詩とほぼ同じ形式での作品例がある場合もある。こうしたケースも同調異体と呼ばれるが、同じメロディにそって一・二字増減したのではなく、旧曲をもとにかなりの改変をした結果と考えられ、中には単に曲名を旧曲に借りただけで、まったく別のメロディだったのではないかと推定されているものもある。

また、詞牌名として明記されることはなくても、実際の作品で句読や平仄、通韻などに違いがある場合には、別体（又一体）として扱われることがある。たとえば『詞律』では、「竹枝」十四字に、又一体として十四字（仄韻）と二十八字を挙げ、「南歌子」二十三字に、又一体として二十六字、五十二字（双調と入声韻の二体）を挙げるなど、先に挙げた「攤破」や「減字」などよりも大きな増減が、実際にはあるのである。

さらに詳しく見れば、詞の押韻法も近体詩とかなり異なり、脚韻の韻目は少ない。清・戈載の『詞林正韻』では十九部（平上去声十四部、入声五部）に分類しており、平上去を区別しても四十七類で、近体詩の二百六韻あるいは百六韻と比べてかなりゆるく通韻する。その代わり、句中の押韻・平仄はきわめて複雑で、平声と仄声が通押するかと思えば、声調については単に平声と仄声を区別するのではなく、仄声の中でも上声・去声が時には入声と通押したり、逆にどうしても一定の声調、たとえば去声でなければならない箇所があるなど、綿密に作られている。

このような言語音声的な形式上の違いは、音楽の旋律と調和させるために生じたものであるが、今日曲調がほとんど失われて考察する方法がないため、何を以て通押を可とし否とするのか、あるいは何を以て同調の異体とするのか、判断するのはかなり難しい。往々にして分類を細かくしすぎる嫌いがあるのは、やむをえないであろう。中には、「踏莎行」五十八字に対する「軋調踏莎行」六十五字や、「梁州令」五十字に対する「梁州令疊韻」百字（四疊）、また「江城子」三十五字と「梅花引」五十七字²⁾の合調「江城梅花引」八十七字³⁾、「西江月」五十字と「小重山」五十八字の合調「(犯調) 江月晃重山」五十四

字⁴⁾など、曲の途中で転調したり、曲の一部あるいは全部をリピートしたことが、詞牌から推察できるものもあるが、詞牌には表れなくても音楽的なアレンジは随所になされていたはずで、それが歌詞の形式の違いとして残されているのである。

詞律の研究とはつまり、パターンの研究である。電子化されたテキストによって詞律を分析しようとする試みは、一つには人為的な作業における粗漏をなくすことが期待されるためであるが、さらに重要なことは、さまざまなパターンの可能性を仮定して最も合理的な格律を導き出すことにある。そのために、文字列が固定される紙上ではなく、自由に動かせる電子媒体上が有効な手段となり得るのではないか。それが本研究のテーマである。

1. 『彊村叢書』のデータベース化

詞律の分析システムを構築するに当たって、まず詞の作品を電子化する必要がある。

唐圭璋の『全宋词』（中華書局、一九六五年初版）は宋词を網羅した書であるが、すでにいくつか電子化されたデータがあるので、今回は著作権問題の発生しない『彊村叢書』を選んだ。

『彊村叢書』は近人朱孝臧（一八五七～一九三一）の編で、唐・五代・宋・金・元の詞籍一百七十二種（総集五種、別集百六十七種）を集めた叢書である。毛晋（汲古閣）『宋六十名家詞』、王鵬運『四印齋所刻詞』、吳昌綬（双照楼）『景刊宋元明本詞』と合わせて、詞籍の四大叢書と称される。中でも『彊村叢書』は、朱孝臧が善本を求めて校訂を三回も重ねており（最後は一九二二年）、詞籍校勘の成果として評価が高い。

もちろん今日から見れば、不足な点もないわけではない。たとえば、叢書の筆頭に収められる『雲謠集』は、三十首が伝存しているが、『彊村叢書』ではイギリスのロンドン博物館所蔵の写本十八首のみを採録して、フランスのパリ図書館の写本十三首を採録していない。とくに、すでに通行する詞集がある場合には採用しない方針であったため、重要な詞人の集、たとえば馮延巳、李璟、李煜、晏殊、歐陽修、黃庭堅、陳師道、謝夢得、李清照、陳与義、陳龍、史達祖、文天祥、王沂孫、などの集が入っていない。こうした唐宋の著名な詞人の集を収めない一方で、金元明の詞人は積極的に拾われている。王兆鵬『詞学

2) 「梅花引」には、別名「小梅花」という百十四字の体もある。もとの「梅花引」二段を合わせて一段としたものを、二回重ねた形式。

3) 「江城子」には、「江城子慢」百九字もある。

4) 「西江月」には、「西江月慢」百三字もある。

史料学』(中華書局, 二〇〇四年)に, 明清の七大詞集⁵⁾に収録される詞籍の一覧がある⁶⁾が, この中で『彊村叢書』にしか収められていない詞人は百十九人, 総集は二点を数え, その収録する詞籍の範囲においても, 群を抜いているのである。

なお, 二〇〇三年九月二十日の第一回宋詞研究会(於慶応義塾大学日吉キャンパス来往舎中会議室)で本テーマについて発表した際, 『彊村叢書』のプレーンなデータも公開して欲しいとの要望があったことを, 付け加えておく。『彊村叢書』は詞籍の版本の考証など, 詞律の分析以外にも利用価値が高いのである。

電子化するに当たっては, 文字列の内容を区別するためのタグ付け作業が必要ということで, まずそれぞれの詞籍の形態を分析して階層に分ける作業をした。例として, 『雲謠集』の階層を挙げておく。

【『彊村叢書』詞籍階層表, 『雲謠集』の例】

- 1 <集> 雲謠集雜曲子一卷 敦煌石室唐写卷子本
 <題箋>
 <目録> <目録題>
 <牌> <注>
 <本文> <卷題>
 <首> <牌>
 <詞>
 <校記> <校記題>
 <集題> (「雲謠」)
 <校>
 <首> <牌> <注> (数字)
 <校>
 <語> <校>
 <跋文>

この作業中に, いくつかの問題が明らかになった。

まず『彊村叢書』は, 当然のことながら叢書であるため, 収録される詞籍の形態はさまざまである。

『彊村叢書』に収められる詞籍は, その成立について二つに大きく分類できる。一つは, 詞集としてすでに単行されていたもの。一つは, 朱孝臧が『彊村叢書』編纂に当たって詩文集から詞を抜き出したもの。後者は形式が一定であるが, 前者は成立の時代や編纂者に

5) すなわち明の呉訥『唐宋名賢百家詞』, 毛晋『宋六十名家詞』, 清の侯文燦『十名家詞』, 王鵬運『四印齋所刻詞』, 江標『宋元名家詞』, 呉昌綬『景刊宋金元明本詞』, 朱孝臧『彊村叢書』の七種。

6) 同書, 一二八～一四八頁。

よって、さまざまな形式となる。しかも、詞集が単行されていたのは、詞人として著名な人の集であることが多い。すでに通行しているものは除いたのであるから、採用された著名詞人の集は、それぞれに特徴のあるものが並ぶことにもなる。中には、王安石『臨川先生歌曲』一卷（宋紹興刊臨川集本）に、『補遺』一卷（無著庵輯本）が付されているように、異なる底本から補遺を拾っている例がいくつかあり、また、姜夔のように、『白石道人歌曲』六卷『歌詞別集』一卷（江研南伝録陶南村鈔本）に張文虎の『舒芸室餘筆』「校白石歌曲」が付されている例もある。『白石道人歌曲』の中にも詞以外のスタイルの「曲辞」が含まれているが、張文虎の校記は詞ではなく文であるから、これも詞籍ではあるけれども、他の詞集とはかなり体裁が異なってくる。

とくに朱孝臧は、南宋・呉文英の『夢窓詞』を入手したことから、『夢窓詞』の箋注にも精力を傾けて、三十年ほどをかけて四回校訂している。今回は電子化しなかったが、『彊村遺書』に『夢窓詞集』が収められており、巻首に「彊村老人定本」と記されて、朱孝臧の校勘に対する自信がうかがわれる。『彊村叢書』のほうには、『夢窓詞集』一卷『補遺』一卷の後に、『夢窓詞集小箋』一卷が付されている。熱心な校勘の成果ではあるが、これも詞集ではないために体裁が大いに異なっており、データベースとしてパターン化するには処理の厄介なものである。

このように網羅的に収集せずにある基準を設けて特徴のあるものを収集すること、収集した後の整理について全体としての形式が統一されていないことは、中国の伝統的な文献処理の在り方ではあるが、データベース設計に当たってはこれが障害となって、なかなか思うように作業が進捗しなかったようである。

2. 「浪淘沙」の詞律分析

以下、唐以来の旧曲である「浪淘沙」を例に、詞律分析のために必要な作業とは何かを検討してみよう。

「浪淘沙」は呉藕汀『詞名作品』（中華書局、一九八四年）に、「唐の教坊曲の名。宋人の浪淘沙令・慢と異なる。おそらく宋人は旧曲の名を借りて新たに調を作ったのであろう。これは七言絶句である。白居易の詞に『却到帝都重富貴，請君莫忘浪淘沙』の句がある」という。この白居易の句は、『全唐詩』卷二十八「雜曲歌辭・旧楽府」に収められる「浪淘沙」で、劉禹錫や皇甫松も同じ題で作っている。

清・万樹の『詞律』では、卷一に以下の詞人と詞体を挙げている。

浪淘沙 二十八字 皇甫松 『彊村叢書』未収
浪淘沙 五十四字 南唐李後主(又名賣花声) 『彊村叢書』未収
浪淘沙 五十四字 宋祁 『彊村叢書』未収⁷⁾
浪淘沙令 五十二字 柳永
浪淘沙慢 百三十三字 周邦彦
浪淘沙慢 百三十三字 周邦彦 『彊村叢書』未収⁸⁾
浪淘沙慢 百三十三字 柳永

『詞律』には、小樽商科大学の萩原正樹氏が電子化した「詞律細目」がある（URLは、<http://www.res.otaru-uc.ac.jp/~hagiwara/UniCilv.html>）。テキストは『詞律』二十卷、康熙二十六年序保滋堂刻、小樽商科大学附属図書館所蔵本を使用している。『彊村叢書』のデータベースと相互に利用できるのが望ましいが、「浪淘沙」の例では、『彊村叢書』未収の作品が四首もある。『彊村叢書』がかなりの数の詞籍を取めているとは言っても、詞律を考

【張炎『詞源』八十四調表、十二均と七調式表】

俗名	太簇	夾鐘	姑洗	仲呂	蕤賓	林鐘
律名	黄鐘	大呂	太簇	夾鐘	姑洗	仲呂
宮	正黄鐘宮	高宮	中管 高宮	中呂宮	中管 中呂宮	道宮
商	大石調	高 大石調	中管 高大石調	双調	中管 双調	小石調
角	正黄鐘宮 角	高宮 角	中管 高宮角	中呂 正角	中管 中呂角	道宮 角
変徵	正黄鐘宮 変徵	高宮 変徵	中管 高宮変徵	中呂 変徵	中管 中呂変徵	道宮 変徵
徵	正黄鐘宮 正徵	高宮 正徵	中管 高宮正徵	中呂 正徵	中管 中呂正徵	道宮 正徵
羽	般涉調	高 般涉調	中管 高般涉調	中呂調	中管 中呂調	正平調
閏	大石 角	高 大石角	中管 高大石角	双角	中管 双角	小石 角

7) 『能改齋漫録』卷十七に収められる。

8) 毛晋『宋六十名家詞』所収『片玉詞』（もと『清真集』を改名）下巻に収められる。『詞律』は、「詞人姓氏録」に「有清真集二卷後集一卷」とあるので、毛本の系統を採用。

察するにはなお十分ではないことが、ここで明らかになった。『全唐五代詞』『全宋詞』などのデータベースと相互に参照できるようにするか、毛晋『宋六十名家詞』、王鵬運『四印齋所刻詞』、吳昌綬『景刊宋元明本詞』などの叢書も電子化する必要があるかも知れない。

2 - 1. 字数・句形

これは今後の課題として、まず、中唐・皇甫松の二十八字の体を見てみよう。(○=平声, ●=仄声, ◎=平声韻)

○○●●●○○◎, ●●○○●●◎。●●○○○●◎, ○○●●●○○◎。

蠻歌豆蔻北人愁，浦雨杉風野艇秋。浪起鷓鴣眠不得，寒沙細細入江流。

平仄もきちんとした七言絶句である。それに対して、宋人の「浪淘沙令」「浪淘沙慢」は、「旧曲の名を借りて新たに調を作ったのであろう」と言われている。柳永の「浪淘沙令」

夷則	南呂	無射	応鐘	黄鐘	大呂
蕤賓	林鐘	夷則	南呂	無射	応鐘
中管 道宮	南呂宮	仙呂宮	中管 仙呂宮	黄鐘宮	中管 黄鐘宮
中管 小石調	歇指調	商調	中管 商調	越調	中管 越調
中管 道宮角	南呂 角	仙呂 角	中管 仙呂角	黄鐘 角	中管 黄鐘角
中管 道宮変徴	南呂 変徴	仙呂 変徴	中管 仙呂変徴	黄鐘 変徴	中管 黄鐘変徴
中管 道宮正徴	南呂 正徴	仙呂 正徴	中管 仙呂正徴	黄鐘 正徴	中管 黄鐘正徴
中管 正平調	高平調	仙呂調	中管 仙呂調	羽調 黄鐘羽	中管 羽調
中管 小石角	歇指 角	商 角	中管 商角	越 角	中管 越角

五十二字の体は、次のようである。(太字は韻字。以下同じ)

有箇人人，飛燕精神，急鏘環珮上華裯，促□**尽**隨紅袖拳，風柳腰身。 蕪蕪輕裙，
妙**尽**尖新，曲終獨立斂香塵，**応**是四肢嬌困也，眉黛双顰。

ちなみにこの詞は、柳永の『樂章集』では中巻に収められ、曲調について「歇指調」と記されている⁹⁾。「歇指調」は俗調名で、林鐘均商調式である。このように曲調の記されている作品は、必要に応じて26～27ページのような表に照らして音律が調べられると、同じ詞牌、同じ曲調、の作品を集めて、音楽面の共通性を比較検討できるかも知れない。たとえば、結声(曲の終わりの音)は、ふつう主音になるので、各関句末の韻目は、メロディの上では「歇指調」の結声である林鐘だった可能性が高い。

当時のメロディが残っていないので、音楽的側面を考察するのは困難だが、同じ詞牌の違う作品と比較する、あるいは同じ作品の中で、前関と後関、第一段と第二段や第三段…、を比較するなど、言語上の特徴を比べてみることはできる。

万樹『詞律』では、五代南唐の李後主すなわち李煜の「浪淘沙令」と比べて、次のように云う¹⁰⁾。

前関後関とも一字ずつ少ないほかは、みな同じ。調名に「令」字を加えているので、後ろに収めたが、小令にすべて「令」字を加えただけで、別体だからということではないという説もある。汲古閣刻本では「有一箇人人」に作って、「促」字の下を誤って一字少なくしているので、いま□で補った¹¹⁾。あるいは「有一箇人人」の五字句で、「蕪蕪」の下が一字脱落しているのかも知れないというが、はっきりとは分らない。「有一箇人人」では語気が第二字でやや途切れる気がするし、周美成(邦彦)の「柳梢青」の起句も「有箇人人」とあるので、疑いようはないと思う。

9) 後に検討する周邦彦の「浪淘沙慢」百三十三字は、『片玉集』巻二「春景」に収められているが、そこには「商調」と記されている。俗名の商調は、夷則均商調式である。

10) 万樹『詞律』巻一に、「比前李詞，前後首句俱少一字，餘皆同。以調名加令字，故收在後，或謂凡小調俱可加令字，非因另一體而加令字也。汲古刻作『有一箇人人』，促字下誤少一字，今為□以補之，或曰『有一箇人人』仍是五字句，或蕪蕪下落一字，亦未可知。余曰『有一箇人人』語氣不可於第二字略斷，周美成柳梢青起句亦云，『有箇人人』，更何疑乎」という。

11) 杜文瀾の校記に、「万氏於促字下空一字，按『高麗史』樂志作促拍，宜從」という。

詞律分析システムの構築に向けて

いま、中唐・皇甫松の二十八字の体、五代南唐・李煜の五十四字の体、北宋・柳永の五十二字の体を、比較してみよう。同詞牌の作品を比べることで、『詞律』『詞譜』の「又一体」が妥当かどうか検討できる。

【単調「浪淘沙」と双調「浪淘沙」の比較】

(○=平声, ●=仄声, ◎=平声韻, ⊙=仄声韻。◐=平声だが仄声も可, ◑=仄声だが平声も可。以下同じ)

単調 浪淘沙 二十八字 中唐・皇甫松	双調 浪淘沙令 前闕 五十四字 五代南唐・李煜 五十二字 北宋・柳永	双調 浪淘沙令 後闕 五十四字 五代南唐・李煜 五十二字 北宋・柳永
○ ○ ● ● ● ○ ◎ 蠻歌豆蔻北人愁	◐ ● ● ○ ◎ 簾外雨潺潺 有箇人人 ● ● ○ ◎	◐ ● ● ○ ◎ 獨自莫凭欄 蕪蕪輕裙 ● ● ○ ◎
	◐ ● ○ ◎ 春意闌珊 飛燕精神 ○ ● ○ ◎	◐ ● ○ ◎ 無限江山 妙盡尖新 ● ● ○ ◎
● ● ○ ○ ● ● ◎ 浦雨杉風野艇秋	◐ ○ ◐ ● ● ○ ◎ 羅衾不耐五更寒 急鏘環珮上華裯 ● ○ ○ ● ● ○ ◎	◐ ○ ◐ ● ● ○ ◎ 別時容易見時難 曲終獨立斂香塵 ● ○ ● ● ● ○ ◎
● ● ○ ○ ○ ● ● 浪起鷓鴣眠不得	◐ ● ◐ ○ ○ ● ● 夢裏不知身是客 促□盡隨紅袖拳 ● ● ● ○ ○ ● ●	◐ ● ◐ ○ ○ ● ● 流水落花春去也 應是四肢嬌困也 ○ ● ● ○ ○ ● ●
○ ○ ● ● ● ○ ◎ 寒沙細細入江流	◐ ● ○ ◎ 一餉貪歡 風柳腰身 ○ ● ● ◎	◐ ● ○ ◎ 天上人間 眉黛雙顰 ○ ● ○ ◎

こうして並べてみると、李煜の五十四字双調と柳永の五十二字双調は、かなり似ている。万樹は「有箇人人」の四字句で李煜とは別体とするが、実際の曲では、四分音符一つと八分音符二つくらいのリズム上の違いだったかも知れない。これを文字数だけで別体とする必要があるかどうか、である。

この表の声調の符標は『詞譜』に従ったが、詞譜としてよく使われている『詞律』と『詞譜』で格律に関する解釈が異なる場合も、ままある。周邦彦の「浪淘沙慢」百三十三字もそのケースである。

【周邦彦「浪淘沙慢」の『詞律』『詞譜』の句読】

『詞律』の句読	『詞譜』の句読
曉陰重・霜凋岸草， 霧隱城堞。 南陌指車待斃。 東門帳飲乍闕。 正拂面・垂楊堪攪結。 掩紅淚・玉手親折。 念溪浦離魂去何許。 經時信音絕。 情切。 望中地遠天濶。 向露冷風清無人處・耿耿寒漏咽。 嗟萬事難忘， 唯是輕別。 翠樽未竭。 憑斷雲・留取西樓殘月。 羅帶光銷紋衾置。 連環解・旧香頓歇。 怨歌永・瓊壺敲盡缺。 恨春去・不與人期， 弄夜色，	曉陰重， 霜凋岸草， 霧隱城堞。 南陌指車待斃。 東門帳飲乍闕。 正拂面垂楊堪攪結。 掩紅淚・玉手親折。 念溪浦離魂去何許， 經時信音絕。 情切。 望中地遠天濶。 向露冷風清， 無人處，耿耿寒漏咽。 嗟萬事難忘， 唯是輕別。 翠樽未竭。 憑斷雲留取， 西樓殘月。 羅帶光銷紋衾置。 連環解・旧香頓歇。 怨歌永・瓊壺敲盡缺。

詞律分析システムの構築に向けて

空餘滿地梨花雪。	恨春去・不与人期， 弄夜色， 空餘滿地梨花雪。
----------	-------------------------------

『詞律』の万樹の注に、各種刻本では二段に分けるが、『詞綜』は「西楼残月」で分段して三段にしており、きっと根拠があるのだろう、という¹²⁾。『詞律』の句読に従いながら、字数や声調の似ているところを対応させつつ「西楼残月」で区切ると、次のようになる。

【周邦彦「浪淘沙慢」三段の場合】

前関	後関	後関（「西楼残月」以降）
<p>●○○ ○●●●</p> <p>暝陰重・霜凋岸草，</p> <p>●●●●○</p> <p>霧隱城堞。</p> <p>○●○○●●○</p> <p>南陌指車待發。</p> <p>○○●●●●○</p> <p>東門帳飲乍闕。</p> <p>●●●● ○○○●○</p> <p>正拂面・垂楊堪攬結。</p> <p>●○○● ●●○○○</p> <p>掩紅淚・玉手親折。</p> <p>●●●○○●○○●</p> <p>念溪浦離魂去何許，</p> <p>○○●○○○</p> <p>經時信音絕。</p>	<p>○●○</p> <p>情切。</p> <p>●○○●○○○</p> <p>望中地遠天濶。</p> <p>●●●○○○●● ●●○○●●</p> <p>向露冷風清無人處・耿耿寒漏咽。</p> <p>○●●○○○</p> <p>嗟万事難忘，</p> <p>○●○○○</p> <p>唯是輕別。</p> <p>●○○●○</p> <p>翠樽未竭。</p> <p>○●○○ ○●●○○○</p> <p>憑斷雲・留取西楼残月。</p>	<p>○●○○○○○●</p> <p>羅帶光銷紋衾暈。</p> <p>○●●● ○●○○○</p> <p>連環解・旧香頓歇。</p> <p>●○○● ○○○●●○</p> <p>怨歌永・瓊壺敲盡缺。</p> <p>○●●● ●●○○○</p> <p>恨春去・不与人期，</p> <p>●●●●</p> <p>弄夜色，</p> <p>○○●●○○○●</p> <p>空餘滿地梨花雪。</p>
	<p>○●○○○○○●</p> <p>羅帶光銷紋衾暈。</p> <p>○●●● ○●○○○</p> <p>連環解・旧香頓歇。</p> <p>●○○● ○○○●●○</p> <p>怨歌永・瓊壺敲盡缺。</p>	

12) 万樹『詞律』注に、「此詞各刻俱作兩段，而詞綜于「西楼残月」分段，作三疊。必有所據」とある。

	<p>●●●● ●●○○</p> <p>恨春去・不与人期,</p> <p>●●●●</p> <p>弄夜色,</p> <p>○○●●○○●</p> <p>空餘滿地梨花雪。</p>	
--	--	--

これをさらに、皇甫松の二十八字単調、李煜の五十四字双調と比べてみる。

【単調「浪淘沙」と双調「浪淘沙」と三段「浪淘沙慢」の比較】

皇甫松・単調	李煜・双調（令）・前関	周邦彦（慢）・前関
<p>○○●●●○○</p> <p>蠻歌豆蔻北人愁,</p> <p>●●○○●●●</p> <p>浦雨杉風野艇秋。</p> <p>●●○○○○●●</p> <p>浪起鷓鴣眠不得,</p> <p>○○●●●○○</p> <p>寒沙細細入江流。</p>	<p>●●●○○</p> <p>簾外雨潺潺。</p> <p>●●○○</p> <p>春意闌珊。</p> <p>●○○●●●○○</p> <p>羅衾不耐五更寒。</p> <p>●●●○○●●●</p> <p>夢裏不知身是客,</p> <p>●●○○</p> <p>一餉貪歡。</p>	<p>●○○ ○○●●</p> <p>曉陰重・霜凋岸草,</p> <p>●●○○</p> <p>霧隱城堞。</p> <p>○●○○●●</p> <p>南陌指車待發。</p> <p>○○●●●●</p> <p>東門帳飲乍闌。</p> <p>●●● ○○○●●</p> <p>正拂面・垂楊堪攬結。</p> <p>●○● ●●○○</p> <p>掩紅淚・玉手親折。</p> <p>●●●○○●●●</p> <p>念溪浦離魂去何許,</p> <p>○○●●●</p> <p>經時信音絕。</p>
		<p>周邦彦（慢）・後関</p> <p>●●</p> <p>情切。</p> <p>●○○●●○○</p> <p>望中地遠天濶。</p>

詞律分析システムの構築に向けて

		<p>●●●○○○●● ●●●●○</p> <p>向露冷風清無人処・耿耿寒漏咽。</p> <p>●●●○○</p> <p>嗟万事難忘,</p> <p>●●●○</p> <p>唯是輕別。</p> <p>●●●○</p> <p>翠樽未竭。</p> <p>●●○ ●●●○○○</p> <p>憑斷雲・留取西樓殘月。</p>
	後関	後関（「西樓殘月」以降）
	<p>●●●○○○</p> <p>独自莫凭欄。</p> <p>●●○○○</p> <p>無限江山。</p> <p>○●●●○○○</p> <p>別時容易見時難。</p> <p>●●●○○●●</p> <p>流水落花春去也,</p> <p>●●○○○</p> <p>天上人間。</p>	<p>●●○○○○○</p> <p>羅帶光銷紋袞暈。</p> <p>●●● ●●●○</p> <p>連環解・旧香頓歇。</p> <p>●●● ●○○●●</p> <p>怨歌永・瓊壺敲尽缺。</p> <p>●●● ●●○○</p> <p>恨春去・不与人期,</p> <p>●●●</p> <p>弄夜色,</p> <p>○○●●○○○</p> <p>空餘满地梨花雪。</p>

周邦彦の作が三段だとすると、「西樓殘月」以降は前関（あるいはもとの小令）に似ていて、後関の前半がアレンジ部分のように見えるが、これはあくまで想像である。本来は、詞の意味や子音によっても、慎重に検討すべきであろう。

いま周邦彦の「浪淘沙慢」百三十三字の体と比べたが、柳永にも先に挙げた五十二字の「浪淘沙令」のほかに、百三十三字の「浪淘沙慢」がある。

【柳永「浪淘沙令」五十二字と「浪淘沙慢」百三十三字の比較】

柳永・小令・前関	柳永・慢調・前関	柳永・慢調・後関
<p>●●●○◎ 有箇人人。</p> <p>○●●○◎ 飛燕精神。</p> <p>●○○●●●◎ 急鏘環珮上華裊。</p> <p>●●●○○●●● 促□尽隨紅袖拳，</p> <p>○●●○◎ 風柳腰身。</p>	<p>●●●○○●●● 夢覺透窓風一線，</p> <p>○○○◎ 寒燈吹息。</p> <p>○○○● 那堪酒醒，</p> <p>●○○○ 又聞空塔，</p> <p>●●○◎ 夜雨頻滴。</p> <p>○○○ ●●○○◎ 嗟因循・久作天涯客。</p> <p>●○○ ●●○○ 負佳人・幾許盟言，</p> <p>●●● ○○○● 更忍把・從前飲會，</p> <p>●●○○○◎ 陡頓翻成憂戚。</p>	<p>○●◎ 愁極。</p> <p>●○○○ 再三追思，</p> <p>●○○● 洞房深處，</p> <p>●●●●○◎ 幾度飲散歌闌。</p> <p>○●○○● 香煖鴛鴦被，</p> <p>●●○○● 豈暫時疎散，</p> <p>●○○◎ 費伊心力。</p> <p>●●○○ 殢雨尤雲，</p> <p>●●○ ○●○○◎ 有万般・千種相憐惜。</p> <p>●○○ ○○●● 到如今・天長漏永，</p> <p>○○●○○◎ 無端自家疎隔。</p> <p>○○○ ●●○○● 知何時・却擁秦雲態，</p> <p>●○○●○ 願低幃昵枕，</p> <p>○○●● 輕輕細說。</p> <p>●○○ 与江鄉，</p> <p>●●● ○○○◎ 夜夜數・寒更思憶。</p>

詞律分析システムの構築に向けて

小令後関		
●●○○ 蕪蕪輕裙。 ●●○○ 妙尽尖新。 ●○○●●○○ 曲終獨立斂香塵。 ○●●○○●● 応是四肢嬌困也。 ○●○○ 眉黛双顰。		

『詞譜』による平仄と字数、押韻の箇所を、似ている部分を並べてみた。小令から慢調へのアレンジで、慢調の前関は小令のフレーズを繰り返し、慢調の後関はさらに複雑なアレンジを加えていて、テンポやリズムが速くなっているような感じがする。

次に、柳永の「浪淘沙慢」百三十三字と周邦彦の「浪淘沙慢」百三十三字を比べると、どうなるであろうか。

【柳永と周邦彦の「浪淘沙慢」百三十三字】

柳永・前関	周邦彦・前関
●●●○○●● 夢覚透窓風一線, ○○○● 寒燈吹息。 ○○○● 那堪酒醒, ●○○○ 又聞空塔, ●●○○ 夜雨頻滴。 ○○○ ●●○○● 嗟因循・久作天涯客。	●○○ ○○●● 暁陰重・霜凋岸草, ●●○○ 霧隱城堞。 ○●○○●● 南陌指車待發。 ○○●●●● 東門帳飲乍闌。 ●●● ○○○●● 正拂面・垂楊堪攬結。

<p>●○○ ●●○○ 負佳人·幾許盟言, ●●● ○○○● 更忍把·從前歡會, ●●○○○● 陡頓翻成憂戚。</p>	<p>●○○ ●●○○● 掩紅淚·玉手親折。 ●●●○○●●● 念溪浦離魂去何許, ○○●○○● 經時信音絕。</p>
<p>柳永·後闋</p>	<p>周邦彥·後闋</p>
<p>○○● 愁極。 ●○○○ 再三追思, ●○○● 洞房深處, ●●●●○○● 幾度飲散歌闌。 ○○○○● 香煖鴛鴦被, ●●○○● 豈暫時疎散, ●○○● 費伊心力。 ●●○○ 殢雨尤雲, ●●○ ○●○○● 有万般·千種相憐惜。 ●○○ ○○●● 到如今·天長漏永, ○○●○○● 無端自家疎隔。 ○○○ ●●○○● 知何時·却擁秦雲態, ●○○●○ 願低幃昵枕, ○○●● 輕輕細說。</p>	<p>●○○ 情切。 ●○○●○○● 望中地遠天濶。 ●●●○○○○●● ●●○○●● 向露冷風清無人處·耿耿寒漏咽。 ●●○○○ 嗟万事難忘, ●●○○● 唯是輕別。 ●○○● 翠樽未竭。 ●●○ ●●○○○● 憑斷雲·留取西樓殘月。 ●●○○○○● 羅帶光銷紋袞疊。 ●●● ●○○●● 連環解·旧香頓歇。 ●○○ ●○○●● 怨歌永·瓊壺敲尽缺。 ●●● ●●○○ 恨春去·不与人期,</p>

●○○○ 与江郷, ●●●● ○○○○ 夜夜数・寒更思憶。	●●●● 弄夜色, ○○●●○○○● 空餘滿地梨花雪。
--	--------------------------------------

周邦彦の「浪淘沙慢」百三十三字だけを見ていた時は、前調に比べて後関が長く、二段ではなく三段かとも思われたが、こうして柳永の「浪淘沙慢」百三十三字と比べてみると、柳永の体も後関が長い。詞の制作は柳永の方が先行しており、周邦彦の作は柳永の作に似ていると言える。

このように、さまざまな体の比較が画面上で大量に自在にできれば、詞律の分析にとってかなり有効なのではないかと期待されるのである。

2-2. 声調・押韻・子音

詞の場合には平声か仄声かの区別だけではなく、平上去入の別が問題になることから、それぞれの文字の声調を知ることも必要である。そのため、『広韻』の韻目や反切が確認できると役に立つ。それが画面上で声調によって自動的に色分けされ、一文字ずつ韻目や反切が確認できると、便利であろう。(いまは、平上去入で示す)

平平去去入平平，上去平平上上平，去上平平平上入，平平去去入平平。

蠻歌豆蔻北人愁，浦雨杉風野艇秋，浪起鷓鴣眠不得，寒沙細細入江流。

蠻→上平 27 刪 (莫還切)，歌→下平 07 歌 (古俄切)，豆→去声 50 候 (徒候切)，

蔻→去声 50 候 (呼漏切)，北→入声 25 德 (博墨切)，人→上平 17 真 (如隣切)，

愁→下平 18 尤 (士尤切)，……二句め以下は省略。

前に述べたように、詞韻は詩韻よりゆるく通押する。柳永の「浪淘沙令」五十二字では、韻字のうち、「人」「神」「裊」「身」「新」「塵」「翠」は上平 17 真韻だが、「裙」は上平 20 文韻で、一字だけ韻目が異なっている。平水韻でも、「真」と「文」は別の部である。だが詞の押韻はもっとゆるく、清の戈載『詞林正韻』では、どちらも第六部に分類される。『詞林正韻』に従い、押韻が自動的に示される工夫があってもいいのかも知れないが、『詞林正韻』は「凡例」に実際の作品から韻を帰納したと述べているが、実は清初以来の音韻研

究の成果を巧みに汲み取り、さらに検索上の便宜をも考慮した実用的詞韻書であり、『詞林正韻』における戈載の詞韻の分類が必ずしも宋词（宋代）の音系を正確に記述していないという批判と、その修正・補足も少なくない¹³⁾。したがって、押韻字を集めて帰納し、『詞林正韻』等の詞韻書の分類が妥当かどうか検証したほうが、むしろよいのではないかと考えている。詞は口語が多用されることから、詞人の出身地により方言音でもっと細かく詞韻の体系を構築しようとする研究もあり¹⁴⁾、そのためにも本研究では敢えて『詞林正韻』ではなく、『広韻』を韻書として電子化することにした。

子音について考察するには、反切上字表や三十六（三十七）字母表とも連動していると便利である。反切上字によって、子音の発音部位と清濁の別が分かる。李煜の「浪淘沙令」五十四字と柳永の「浪淘沙令」五十二字の冒頭で、子音を比べてみよう。

【李煜と柳永の「浪淘沙令」の子音（部分）】

浪淘沙令 五十四字 李煜	浪淘沙令 五十二字 柳永
<p>● ● ● ○ ◎</p> <p>簾 外 雨 潺 潺</p> <p>l- ŋ- ɥ- dz- dz-</p> <p>舌 牙 喉 齒 齒</p> <p>次濁 次濁 次濁 全濁 全濁</p>	<p>● ● ○ ◎</p> <p>有 箇 人 人</p> <p>ɥ- k- ř- ř-</p> <p>喉 牙 齒 齒</p> <p>次濁 全清 次濁 次濁</p>
<p>簾：下平 24「鹽」（力鹽切）</p> <p>外：去声 14「泰」（五會切）</p> <p>雨：去声 10「遇」（王遇切）</p> <p>潺：上平 28「山」（昨閑切，又土連切）</p> <p>潺：上平 28「山」（昨閑切，又土連切）</p>	<p>有：上声 44「有」（云久切）</p> <p>箇：去声 38「箇」（古賀切）</p> <p>人：上平 17「真」（如隣切）</p> <p>人：上平 17「真」（如隣切）</p>
<p>● ● ● ○ ◎</p> <p>独 自 莫 凭 欄</p> <p>d- dz- m- b- l-</p> <p>舌 齒 唇 唇 舌</p> <p>全濁 全濁 次濁 全濁 次濁</p>	<p>● ● ○ ◎</p> <p>藪 藪 輕 裙</p> <p>s- s- tʃ- g-</p> <p>齒 齒 齒 牙</p> <p>清 清 全清 全濁</p>

13) 拙論「戈載『詞林正韻』の成立をめぐって」、『お茶の水女子大学中国文学会報』7、お茶の水女子大学中国文学会、123～138頁、1988年4月、参照。

14) 例えば、魯国堯「宋代辛棄疾等山東詞人用韻考」、『南京大学學報（哲學社會科學）』、一九七九年第二期など。

独：入声 01「屋」(徒谷切)	藪：入声 01「屋」(桑谷切)
自：去声 06「至」(疾二切)	藪：入声 01「屋」(桑谷切)
莫：入声 19「鐸」(慕各切)	輕：下平 14「清」(諸盈切)
凭：下平 16「蒸」(扶氷切)	裙：上平 20「文」(渠云切)
欄：上平 25「寒」(落干切)	

子音が詞律とどのように関係するのかは、まだよく分からない。ふつう詞譜でよく取り上げられるのは、韻や声調である。だが、子音の唇齒牙舌喉・輕重清濁の区別もメロディと深く関わることは、北宋末の詞人李清照がつとに「詞論」で論じたことであり、南宋・張炎の『詞源』「音譜」(卷下)でも、父の張枢の詞を例に¹⁵⁾、

これ(「瑞鶴仙」)を曲譜に一つ一つ当てはめてみると、音調と字音はみな合っていたが「撲」の字だけがやや合わなかったので、「守」の字に改めると合った。端正で音律に合った詞にするためには、一字もおろそかにはできない。まことに音律に合わせるのは容易ではない。

また「惜花春起早」(散逸)を作った時に「瑣窓深」の句があった。「深」の字が合わないように思ったので、「幽」の字にしたがまた合わないの、再度「明」の字に改めて歌ってみると、はじめて合った。この三字はみな平声であるのに、どうしてこうなるのだろうか。おそらく五音に唇音・齒音・喉音・舌音・鼻音があるため、輕清重濁の区別があるのである。平声の字でも(五音が合えば)上声か入声に置き換えることができるのは、このためである。

と述べている。「瑞鶴仙」で問題になった「撲」と「守」は、曲のメロディに対して字音の声調が合わない例である。「撲」は入声、「守」は上声で、ここは上声を用いるべきで入声では置き換えられないのである¹⁶⁾。「惜花春起早」で検討された「深」「幽」「明」の三字は、子音が異なる。「深」は齒音、「幽」は喉音、「明」は唇音である。「瑣窓深」と作る

15) 張炎『詞源』「音譜」(卷下)に、「按之歌譜，声字皆協，惟『撲』字稍不協，遂改為『守』字乃協。知雅詞協音，雖一字亦不放過，信乎協音之不易也。又作『惜花春起早』云，『瑣窓深』。『深』字意不協，改為『幽』字又不協，再改為『明』字，歌之始協。此三字皆平声，胡為如是。蓋五音有唇齒喉舌鼻，所以有輕清重濁之分，故平声字可為上入者此也」とある。

16) 『詞源』輪読会編『張炎「詞源」訳注稿(二)』，一四～一五頁，の明木茂夫の注，参照。

と、「瑣」も「窓」も齒音で、齒音が三字並ぶので好ましくないのであろうか。「深」と「明」はどちらも前寄りの子音であるが、「深」は陰平で、「明」は陽平、「窓」が陰平なので、ここは陽平の「明」のほうがよいとの結論になった。

「瑣窓深」と「瑣窓幽」は意味に近いが、「瑣窓明」では反対の意味になってしまう。だが張炎は父の張枢の苦勞を記した後に、「詞を作る人が、もし歌うことのできない旧本に頼って一字一字填めて、誤りに誤りを伝えていることに気づかないならば、いたずらに思索を費やすだけだ。歌うことのできる詞を優れた作と考えるべきで、たとえ小さな欠点があってもほほよろしい」と述べている¹⁷⁾。つまり、内容を多少犠牲にしても音律を守ろうと主張しているのである¹⁸⁾。

張炎らはとくに音律をグループで研究していたので、他の詞人たちも等しくこのように子音にこだわりをもって作詞をしていたかどうかは疑わしいが、後の戯曲では「咬字」など、歌や科白における子音と声調の出し方を探求しており、子音が声調やメロディと関わることは確かなようで、そのために反切上字も詞律の検討材料として重要である。

おわりに

以上、「浪淘沙」を例に、詞律の分析にはどのような要素があり、どのようなシステムがあれば有用か、考えてきた。以上の内容を二〇〇三年九月二十日の第一回宋詞研究会で発表した際には、web上に資料を用意してリンクを貼り、仮想のシステムとして提示しながら説明した。いま同じ内容をこうして文章化してみると、問題を整理して論理的に考察するには紙媒体に印刷として固定することを前提とした線的な文章のほうがふさわしいが、いろいろな角度から様々な試みをしようという段階では、電子化されたデータはかなり有用であった。次のURLに口頭発表時の資料を載せてあるので、あわせて参照されたい。

<http://web.hc.keio.ac.jp/~murakosi/cidb.html>

(付記) 本稿は平成14～16年度科学研究費補助金(基礎研究(C)(1)「次世代中国古典文献データベース構築の基礎的研究」(課題番号14510494))による研究成果の一部である。

17) 張炎『詞源』音譜(卷下)に、「述詞之人、若只依旧本之不可調者、一字填一字、而不知以訛傳訛、徒費思索。当以可調者為工、雖有小疵、亦庶幾耳」という。

18) この問題については、拙論「南宋の詞学と琴」、慶應義塾大学日吉紀要「人文科学」第19号、2004年5月、でも取り上げた。